

学生時代と図書館 41

写本との出会い：手書きの本のぬくもり

堀川 徹

私が大学に入ったのはいわゆる「学園紛争」の時代で、当初は落ち着いて勉強していれば良いという雰囲気ではありませんでした。教養部での2年間を終えて専門課程へ進む時、私は西南アジア史学科を選択しました。入学した前年の1968年に新設された学科で、授業は古代オリエント学を除けば、大半がイスラーム世界の文献や歴史に関するものでした。

西南アジア史関係の図書は、文学部史学科の書庫の地下に収められていました。最初にそこへ入った時のショックを私は今でも忘れません。書架がガラガラだったのです。日本史や東洋史・西洋史のように伝統ある学科の充実した蔵書に比べると「惨め」の一言で、たまに少しまとまったシリーズがあるかと思えば、東洋史学科が以前に購入した西アジア関係の図書という具合でした。

日本におけるイスラーム研究は、ようやく戦後から本格化したところで、まったく新しい学問と言ってよいでしょう。書庫に本がないのも当然でした。古くからイスラーム世界と係わりを持った、欧米の研究成果を吸収することが勉強の第一歩でした。同時に、現地語で書かれた史料にも挑んでいかねばなりませんでしたので、語学の不得意な私は、それまでの不勉強をおおいに悔やむこととなりました。また、史料にしても校訂テキストが出版されている場合は少なく、世界各地の図書館に所蔵されている写本を幾つかマイクロ・フィルムで取り寄せて利用することも珍しくありませんでした。

こうした私にとって、写本がより身近なものとなったのは、1981年に本学に赴任し図書館の書庫で230冊にもぼるアラビア語、ペルシア語、トルコ語の写本の山を見せられた時でした。イスラーム世界とは縁の薄い日本では、最大のアラビア

文字で書かれたイスラーム写本コレクションだったのです。それはまさに運命の出会いでした。私を導いてくれた不思議な力に感じて、その場でコレクション



の整理とカタログ作成を決意したのでした。それぞれ専門の研究者の協力を得て、ペルシア語、トルコ語の順に整理をし、ずいぶん時間がかかってしまったのですが、最も数の多かったアラビア語写本のカタログを刊行したのが、奇しくも学園創立50周年にあたる年度（1998年3月）でした。

実はこの間、1983年度に一年間トルコで勉強する機会を得ました。さまざまな図書館や古文書館を訪れて、写本や外交文書などの調査を行いました。一番印象に残っているのは、イスタンブールのスレイマニエ・モスク付属図書館です。中世の学院（メドレセ）をそのまま利用した図書館で、さすがオスマン帝国の旧都イスタンブールで最大の蔵書数を誇るだけあって、非常に質のよい写本が集まっていました。

落ち着いた雰囲気の閲覧室には、V字型を広げたような形をした木製の書見台が机の上に並んでいます。イスラーム世界では、背表紙を本体に直接貼り付けて製本しますので、本を180°まで開いてしまうと背が割れてしまうのです。この書見台を使うと、日本ではとぎついていた写本が読める、あるいは、読めるような気になるから不思議です。写本は元の本から手で写したものですから、書き手の癖や思いが字面に出てきます。しばらく読んでみると、特に固有名詞などは一つの画像となって目に飛び込んできます。また、丁寧にほどこされた装丁や修理の痕、本文や見返しの書き込み、蔵書印から落書きに至るまで、その本のたどった歴史が、ぬくもりとなってそれぞれの写本から伝わってくるのです。

写本との出会い 私の研究生生活の原点です。

ほりかわ とおる（教授・西南アジア史）